

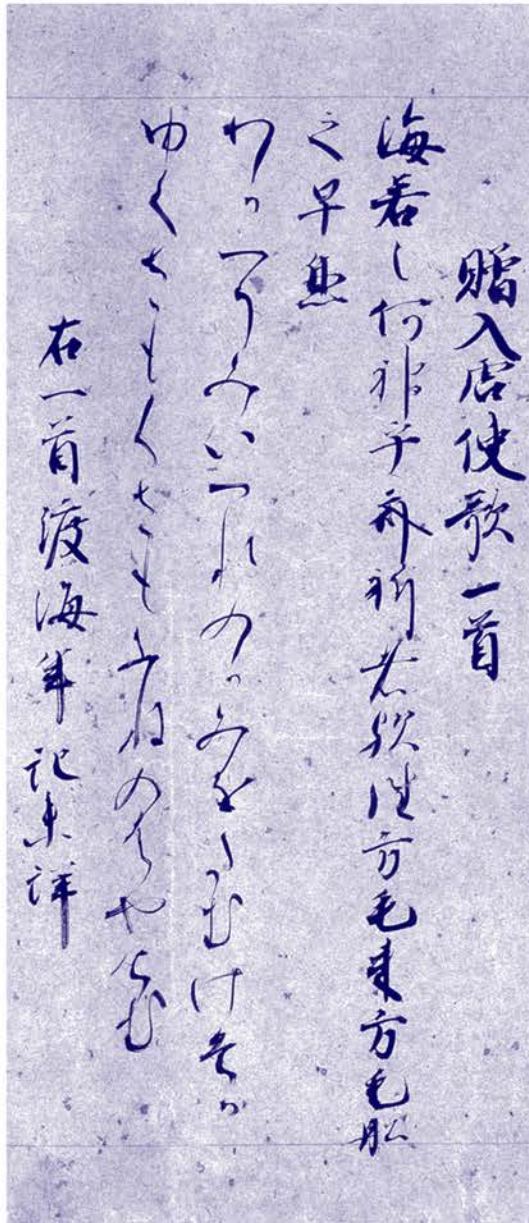
博物館 Dictionary No.172

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館オープン記念展「京へのいざない」にちなんで

国宝 万葉集巻第九残卷
(藍紙本)

今日は、藍で漉き染め—出来た紙を藍の中に入れ、漬けて染めるのではなく、紙を漉く時に紙の材料と一緒に藍を入れ交ぜて紙を漉くことをいう—した紙に『万葉集』が書写されていることから、「藍紙本」と呼ばれている『万葉集』を見てみましょう。



〔写真〕 国宝 万葉集巻第九残卷(藍紙本)部分 京都国立博物館蔵

贈入唐使歌一首

海若之何神乎齋祈者歟往方毛来方毛船
之早兼

わかつうみいつれのかみをたむけはか
ゆくさもくさもふねのはやけむ

右一首渡海年記未詳

(意味) 海の神のどの神に祈つたら、行き

も帰りも、船が早いのだろうか。

『万葉集』は、奈良時代に編纂されたわが国最古の歌集で、全体は二十巻、歌の数は四千五百首余りを取っています。歌の内容では、主に恋愛の歌からなる相聞歌（知らせを通じ合う意味）、死者を哀悼する歌である挽歌、これらに属さない雑歌などを基本とし、歌の形式としては、主に長歌と短歌からなっています。また長歌には、長歌の後により添える短歌である反歌が添えられていることが多くあります。

この時代には、まだ仮名の文字が出来ていませんでしたので、表記には、漢字と、漢字を使った万葉仮名が用いられました。漢字を本来の表意文字（意味を表す文字）ではなく、日本語の音を表すために借りて用いるものが万葉仮名とってよいでしょう。『万葉集』の最初は、漢字ばかりでしたが、平安時代十世紀半ば頃に短歌には平仮名の読みが付けられ、真名（漢字のこと）と仮名（ひらがな）の歌が並んで書き写されるようになり、今見ているようなかたちになったのです。

相聞歌の部類に入っている「入唐使に贈る歌一首」[写真]を見てみましょう。

（思い慕う人が遣唐使になったので、）遣唐使が早く唐につき、帰りも早く帰れるように、海の神に祈りつつ、遣唐使の無事を願う気持ちが込められた歌だと思います。ただし、いつの時の事かは、わからないというものです。

紙に目をやると、天地には淡い墨で線が引かれており、紙の表面には、銀のもみ箔—手で細か砕いた箔—があらく撒かれています。本文の書写者は、字すがたなどから、藤原行成の孫にあたる藤原伊房（1030-96）と認められており、平安時代十一世紀の後半の写本ということになります。巻末の奥書には、「始自九月十七日至于廿日写之了」（九月十七日から始めて二十日に写し終えた）とあることから、三十紙近くを四日間で書き写したことがわかります。中々、スピーディな書きぶりなのです。

そういえば、平安時代の平仮名には、繊細な筆線のものが多いのですが、この「藍紙本」は、漢字も平仮名も筆線が太く、字粒もやや大きめになっているのが特徴です。もちろん、平安時代に書写された『万葉集』では、代表的な写本のひとつに挙げられているのです。

（上席研究員 赤尾栄慶）